



あちこちの生け垣に赤い花が咲いている。作家の永井龍男が「山茶花（さざんか）の散るにまかせて晴れ渡り」と詠んだサザンカだ。この寒空にめげず、けなげに次々と花を付けては散っていく。冬に彩りを添えてくる。

そんな花を濡らす初冬の頃の雨は「サザンカ梅雨」と呼ばれる。一般に立冬を過ぎると晴天が多くなるが、時折季節違いの長雨に見舞われる。天気相談所の先輩は、菜の花が咲く頃の「菜種梅雨」にならってサザンカ梅雨と名づけた。

13日、水戸での日没は1年で最も早く午後4

2016.12.11

「気象コンパス」主宰

古川 武彦

山茶花

時24分、昼間は9時間43分だが、21日の冬至を境に太陽の高度は再び高くなり始め、日脚がわずかずつ延びていく。

ユーラシア大陸のシベリア高気圧に目を転じれば、これからが発達の本番。太陽高度が低くて日射が弱く、また放射冷却で地表付近の気温が下がり続け、乾燥した冷たく重たい空気が下層付近に滞留して「シベリア気団」が形成される。中心付近の気圧は平均で1040hPa程度、1070hPaまで発達することもまれではない。

ひとたび日本列島に南下すると、日本海でたっぷり水蒸気を吸収して「筋雲」が発達し、日本海の沿岸や山々に雪を降らせ、しばしば吹雪に見舞われる。関東地方には山を越えた乾いた北西の風をもたらす。「筑波おろし」や「赤城おろし」だ。

(元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住)



2016.12.18

「気象コンパス」主宰

古川 武彦

北半球・南半球

本番。冬至は南半球で見れば夏至に当たるので昼間が最も長い。そもそも冬至や夏至、季節が存在するのは「赤道面」と「公転面（地球が太陽の周りを1年かけて回る面）」が23.5度傾斜しているからだ。傾いていなければ、太陽は常に赤道の真上を巡るだけで、春分や季節もない。

スパコンを用いた天気予報は、今日・明日のような短期では日本周辺を切り取った領域内だけで計算が行われる。南半球は関係ないが、週間予報などではヨーロッパはもちろん、南半球を含む地球全体の予測計算を行い、その中から関東地方の部分だけを切りだして発表している。スパコンの内部では地球全体の天気予測を行なっていることになる。気象庁はアジア諸国の天気予報サービスを支援する地域センターとして、台風の予測情報などを提供している。

(元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住)



鈴なりの柚子(ゆず)が金色に輝いている。21日は冬至。柚子湯を立てて、カボチャなどを食して無病息災を願う。冬至は1年で最も昼間が短い。水戸では約9時間40分、夏至の約14時間40分に比べて5時間も短い。冬至は日の出が最も遅く、日の入りが最も早いわけではない。一番遅いのは1月初旬、早いのは12月初旬だ。理由は地軸が傾いていること、太陽を周回する地球の軌道がわずかに楕円(だえん)であることだ。

ふだんあまり気にしないが、北半球と南半球では季節が正反対だ。台風シーズンもこれから

